

のもの同じく 27.27 %である。母體は同じく現在も尙陽性なるに兒は分娩時も現在も共に陰性なるもの 6%である。余が所謂非特異性反應ならんと思惟するものか、母體に 38 %、兒に 15 %を認めたのである。即ち余は本調査に於て非特異性反應を呈する數の意外に多きを認め、妊産婦に於ける梅毒診断の複雑なるを痛感したのである。

追 加

磯 田 仙 三 郎

出産直後にワ氏反應陽性にしてその後自然に陰性となるものは梅毒でないと解釋されて居る。

## 5. 新産兒輸血に就て

東京帝國大學醫學部産婦人科教室

宮 地 國 榮

新産兒輸血の適應症として今日まで最も多く應用せられたるは新産兒メレナで其他早産兒、生活力微弱兒、新産兒假死、新産兒黃疸を數へる。輸血部位としては靜脈が細小で發見困難な事が多く、上縦竇、頸靜脈、分娩直後では臍帶靜脈、腹腔内等が用ひられるが皆一得一失がある。足内顆蓄微靜脈は新産兒殊に早産兒では比較的太く發見容易で、心臓に近く、固定しやすい利點がある。胸骨骨髓内輸血は 1940 年 Henning に依つて發表され、我國に於ても多數の追試者があり、今日成人に於ては有力な方法として認められて居る。私はこれを昨年 5 月以降新産兒に應用して満足すべき結果を得て居る。この方法は、先づ豫備實驗として 20 例の死産兒に就き、胸骨の解剖的關係を成人のそれと比較研究し、更に生體にスギウロンを注入してレ像により近接靜脈の關係を明かにした後臨牀實驗を行つた。穿刺部位、第 1 肋間で胸骨の中央、刺入の深さは 4 mm 以下、注入速度は 20cc. を 1½~5 分間とする。臨牀實驗例は主として早産兒、生活力微弱兒、新産兒メレナに應用した。輸血部は胸骨骨髓内 28 例 35 回、足内顆靜脈内 20 例 25 回、頸靜脈内 3 例 3 回、臍帶靜脈内 3 例 4 回、上縦竇内 1 例 2 回、腹腔内 1 例 2 回、合計 56 例 71 回。副作用、殆どない。輸血後の経過、一般状態は第 1~2 日から良好となり元氣よく哺乳量も増した。輸血による血液所見の變化は生理的にも網狀赤血球、有核赤血球、幼若白血球が多數現出し動搖の甚しい時期で一定の成績は得られなかつた。輸血々液及量、ホルモン投與を考慮して主として母血を用ひ異型其他やむを得ない時のみ父又は其他の血液を用ひた。1 回量は 20~25 cc. 私は今日までの臨牀實驗に鑑み新産兒では足内顆靜脈及び胸骨々髓内輸血法を推奨するものである。

## 6. 急性黃色肝萎縮症の臨床例に就て

東京女子醫學專門學校今村内科教室

大 石 和 子

石 田 和

昭和 16 年以來當内科に於て、急性黃色肝萎縮症の 2 例を経験せり。2 例共に中年以上の肥滿した婦人に來り、経過急性にして、黃疸高度に現はれ、尿中にチロジン及びロイチンの結晶を認め、肝臟濁音界急速に縮小し、出血性素因及び腦症狀を呈し死亡せり。